

第2章

東京プログラム

1 東京プログラムについて

外国参加青年は、9月26日（火）の夜にオリエンテーションを受けた。27日（水）午前から29日（金）までの「国際青年交流会議」では、日本参加青年と共に、キャリア形成・メディアリテラシー・多文化共生の3コースに分かれて、ディスカッションや課題別視察を行い、29日（金）には、三日間にわたる活動をまとめた成果発表会を行った。10月9日（月）にはボランティアの日本青年の同行のもと、都内体験プログラムに参加した。

2 国際青年交流会議:ディスカッション・プログラム（9月27日～29日）

キャリア形成コース

◆テーマ

人工知能時代における効果的なキャリアプランニングとは

◆コースの目的

人工知能の台頭によって近い将来、既存の職業がなくなると唱える者もいるが、間もなく到来する人工知能時代のキャリア形成では、何が肝となってくるのか。人工知能はどのような好影響、悪影響をもたらし、我々にとっての機会や脅威とは何か。我々はこの新しい事態にどう適応し、各参加国におけるキャリア形成の定石や典型的な手段を踏まえた上で、今後状況の変化を見据えて何ができるだろうか。

このコースでは、未来についての予測や、参加国間でのキャリア形成における定石及び典型的な手段の比較、そして経験やエピソードの共有により、参加青年がキャリア形成に対する知見を広めることを目的とする。

◆9月28日課題別視察先

特定非営利活動法人ETIC.

◆キャリア形成コースのスタッフ

ファシリテーター：

実行委員：

実行委員：

実行委員：

日時	プログラム	場所
9月26日(火)		
18:00-19:30	夕食交流会	成田エクセルホテル東急
20:00-21:30	国際青年交流会議オリエンテーション	
9月27日(水)		
10:30-12:00	[コースディスカッション 1]	ホテルニューオータニ
13:00-14:30	[コースディスカッション 2]	
15:00-16:00	懇談会	
16:15-17:50	成田エクセルホテル東急へ移動	
18:00-19:30	夕食交流会	成田エクセルホテル東急
20:00-21:30	コースディスカッション	
9月28日(木)		
8:50	ロビー集合	国立オリンピック記念 青少年総合センター
10:45-12:00	グループディスカッション	
12:10-13:10	昼食	
13:20-14:40	グループディスカッション	
15:15-16:15	NPO法人ETIC.加勢雅善氏によるレクチャー	
18:00	ホテル着	成田エクセルホテル東急
18:30-20:00	文化交流会	
9月29日(金)		
9:00-12:00	コースディスカッションまとめ	成田エクセルホテル東急
14:00-15:30	成果発表会	
15:45	日本参加青年、国立オリンピック記念青少年総合センターへバス移動	



参加者は十代の学生から、大学卒業後に相応の社会人経験を積んだ者までおり、専門分野も異なることから自ずと多角的な話合いに広がった印象があります。また、ファシリテーションの目的は知識の伝授でないため、なるべくハンズオフな運営を試みましたが、それに耐え得るだけの資質ある参加者が揃いました。

ただし、気が付けば基本的に大卒を前提とした発想や議論の進み方が支配的となっていた点については、今回集まった参加者の特性や背景に鑑みて、皮膚感覚を伴った議論をする上での限界があったと思われま

す。日本人としては、アイルランド、エストニア、チリ、ドミニカ共和国、ミャンマー、ヨルダンの国民と話すこと自体がそもそも極めて貴重だったに違いありません。試しに日本参加青年にエストニアはどこにあるか尋ねると、「北欧」「東欧」「中欧」とバラバラな答えが返ってきました。実際いずれにも分類されることがあるし、はたまた「中東欧」という括りも受けるユニ

クな立ち位置ですが、こうした国の代表青年たちから大いに触発されていた模様です。また、当初「アイルランドはイギリスの小さい版。というよりほとんど一緒でしょ」という認識の者もいましたが、それが禁句であり、そして必ずしも事実でないことをそれとなく学べたようでした。

議論の中身について、まずキャリア形成の常識や定石が国によって大きく異なることを認識できた点は成功と言ってよいでしょう。次に、国は違えど現在「青年」とされる者がプロフェッショナルとしてちょうど脂がのった円熟期に大きな影響を受けるだろう人工知能という存在、そして伸びていく（現役）寿命について、注意を喚起できた点はねらいどおりでした。ややもすると何事も過去や目の前ばかりを参照して「前例主義」に陥りがちですが、視点の時間軸を伸ばし、未来の世の中がどのようなようになっていくと考えるのか、それを踏まえて自分はどう動きたいのか自問自答させる一石を投じることができたのなら幸いです。

日本参加青年 エストニア派遣団

私は国際青年交流会議に参加し、来るべきAI時代に向け、人間力を育てていくことの大切さと格差をなくす教育支援の必要性を学びました。

キャリア形成コースでは「AIが進化することに賛成か反対か」について議論をしました。賛成側からは新薬開発の費用・時間短縮によって多くの命を守ることのできる点や精度の高い未来予測により社会課題の早期解決につながる点が挙げられていました。一方、反対側のチームからは技術発展により所得格差が広がる点や人間が機械をコントロールすることができなくなる点が懸念されていました。

様々な地域の青年が参加する中で、IT先進国であるエストニア青年からはIT関係の職業についている人とそうでない人の所得格差が約2倍になっている現状や、ミャンマー青年からは教育現場においてITを活用することで教育の質が上がっている話など、技術革新によるメリット・デメリットについて世界の現状

を知り、意見交換を行うことができました。

日本においても多くの企業がAIの活用に向けて研究を進めています。AIとのより良い未来構築に向け、人間だからこそできる創造力の向上や、所得格差を生まない社会支援を行っていくことが必要ではないでしょうか。



9月26日から10月10日に開催された国際青年育成交流事業の参加青年に選んでいただいたことを心より感謝いたします。ディスカッション・プログラムに積極的に参加し、このレポートをまとめるに当たってはミャンマー参加青年から集めたデータを参考にしています。

9月27日から29日にかけて東京で開催された国際青年交流会議のテーマは、キャリア形成、メディアリテラシー、多文化社会の三つが設定されていました。ドミニカ共和国、エストニア、ミャンマー、チリ、アイルランド、ヨルダン及び日本の7か国の青年が各自関心のあるテーマに分かれました。私が選んだディスカッション・テーマはキャリア形成です。ディスカッションの事前課題として「人工知能時代における効果的なキャリアプランニング」について1,500字程度にまとめたことで、キャリア形成と人工知能（AI）時代について学ぶ機会を得ました。私は事前課題を通じて、キャリア形成において重要な五つの要素を見出しました。それは、明確かつ現実的なキャリア目的の設定、拡大された豊かな学習環境、SWOT分析の実現、キャリアデマンドに関する啓発及び適応、ワークライフバランス（動機付け及び価値）です。

9月27日、私たちは2グループに分かれ、さらにグループ内でAI肯定派、否定派、審判役に分かれて討論しました。私はグループの審判役として討論のスタイルやチームの勝敗を判定する基準を決め、人工知能がキャリアに及ぼす影響について肯定派と否定派のグループの意見を聞きました。私は事前課題についてインターネットや経験豊かな大学教員から学んだ多くのことをグループメンバーと共有し、効果的にディスカッションに参加できました。ディスカッションの結果、肯定派の意見が否定派の意見を上回りました。私たちはディスカッション全体を振り返り、肯定派と否定派の意見をまとめ、皆で解決策を考えました。AIの最大のプラスの影響は、人工知能が人間をより創造的にすることです。ソフトウェアを開発することで反復作業を減らし、安全性と正確性を高め、職場での精度の向上や時間の節約、災害時の人命救助、技術者の仕事の創出につながります。一方、否定派の意見も同じくらいありました。人工知能による失業の増加、発展途上国及び貧困国と先進国及び豊かな国のスキル格差やサイバー犯罪の発生、受付係や案内係、両替係な

どの仕事がロボットに代替されることで、人間性や人とのつながりが消失し、偏見が生まれ、文化も消滅するという意見です。

私たちのグループはこれらの解決策として、教育、職場、公共政策、キャリアデマンド、人による意思決定、啓発プログラムの六つを導き出しました。教育現場においては、仕事につながる最新のスキルやキャリアデマンドに適した強化カリキュラムを組み学生を指導することが必要です。例えば、会計士の仕事では書類事務だったのが、コンピューター、ソフトウェアなど高度で複雑なものを扱うことが求められるようになりました。もしこれらの高度なソフトウェアを使いこなすことができなければ、失業してしまうでしょう。進歩のペースは目覚ましく、学生には高度なテクノロジーを使いこなすための訓練が必要です。職場においては、解雇されないために、単純な手作業を行う労働者から、人工知能機器を取り扱える上級労働者へとスキルアップのための訓練が必要です。雇用者は生産性を向上させ、従業員も仕事を失わずにすむWin-Winの関係が可能なのです。これらの実現に向けて、政府は雇用者の教育と、従業員向けのキャリアデマンド啓発プログラムの開発を掲げた公共政策を設定することが求められます。重要な点は、職種によっては人間による意思決定が今後も必要であるということです。例えば、高度な人工知能による診断機器を利用したとしても、患者に処方する薬の種類と分量を決定できるのは人間の医師だけです。また、学習スタイルや知性が異なる学生一人一人に応じた指導法や技術を決定できるのは人間の教師だけです。初日のディスカッションでは様々なアイデアを共有、検討できたと思います。

9月28日、国立オリンピック記念青少年総合センターに移動し、各国参加青年からなる小グループに分かれて午前のディスカッションに取り組みました。エストニアから学んだことは、彼らの国は人工知能先進国であるということです。失業中の国民に対して政府が無料で職業訓練コースを提供しています。頭脳流出や国外移住を防止するために、雇用を創出するなどのインセンティブを政府が提供しています。エストニアの人口は130万人でEU加盟国です。午後のディスカッションでは、アイルランド参加青年が提案した、関心、スキル、価値等のアウトラインに基づいて話し合いました。

た。まず明確にすべきは仕事の需要と供給についてです。

9月29日、私たちは3グループに分かれて、前二日間で「人工知能を統合した理想社会」をテーマに話し合った内容をまとめました。ポイントは人工知能への理解、貧困国や途上国における全てのアプリケーションへの低価格または無料のアクセス権、明確な国際法、価値観、スキル及び関心に基づく新たな需要と供給により形成されるキャリア、スキル重視のキャリア開発、スキルを必要とする人間を中心に据えてそれぞれの国やコミュニティに適した人工知能、複雑化した世界における災害時のシミュレーションなどです。まずは「スキルアップ」として、スキル重視のキャリアアップを組織が提供すること。そして職場においては、現

地労働者の雇用数に応じて税制面で優遇するなどの「条例」を設ける必要があること。そして、フォーマルとインフォーマル両方の「教育」プログラムを組む必要があることなど。

人工知能がキャリアに及ぼす影響と対策が国によって様々であるという結論を私たちは導き出しました。価値ある新しいアイデアを各国参加青年で共有し、学び合いました。大学教員として、私はこれらのアイデアと経験を学生や博士課程研究員の同僚に伝え、共有したいです。さらに、外国青年とミャンマー青年の成熟度に違いが見られたこと、特に批判的思考、課題への対策、自己啓発、勤勉さ、自立度においてそれが顕著であったことを伝えたいと考えています。

チリ参加青年

現代の世界は急速に発展し、科学技術を生み出し、その進歩は留まるどころを知らず。多くの場合、科学技術の進歩は私たちにとって歓迎すべきものですが、人工知能に関しては、それが個人の生産性を高め、私たちの日常生活の向上につながると分かっていますが、議論の余地があるようです。

国際青年育成交流事業のプログラムでは、人工知能が人々の生活で果たす役割が増していることの賛否について、東京と成田の会場でディスカッションしました。私たちは様々な意見を聞いて議論し、その成果を発表しました。

続く沖縄県プログラムでは、キャリア形成についてディスカッションに取り組み、人々の生活向上のため自分たちにどのような活動ができるかを話し合いました。

た。ディスカッションでは、ボランティアを通じて支援活動をしている人たちから感動的な言葉を聞くことができました。この経験を振り返り、彼らを手本にしたいと思います。

この事業を振り返って感じることは、国際性を備えた参加青年が一様に直面するテーマについて、高いレベルでディスカッションできたということです。

私が成田と沖縄でのディスカッションから導き出した結論は、新しい科学技術の進歩を追求してきた人間の歴史を考えると、人工知能の発展は避けられないということです。そのため、条例の明確な枠組みや公共政策の策定、国内及び国際的な公平性の保持、とりわけ人工知能が人間の幸福にとって良い影響となるようなプロセスの理解が重要なのです。



メディアリテラシーコース

◆テーマ

メディアリテラシー

◆コースの目的

不確実な情報や思い込みなどの選択バイアスにとらわれず、信頼に値する情報を選択するためには、自分自身で信頼できる情報を見分け、報道と事実の違いを理解する能力を身に付けることが重要である。

このコースの目的は、メディアリテラシーについて理解し、メディアへのアクセス、分析、評価、創出のための能力を身に付けることである。現代の情報とメディアが社会に与える影響について議論する。その上で、情報の提供者としてどのようにメディアを活用して情報を発信すべきか、また、情報を受け取る側としてどのような点に留意すべきかについて議論する。

◆9月28日課題別視察先

江戸川大学メディアコミュニケーション学部マスコミュニケーション学科

◆メディアリテラシーコースのスタッフ

ファシリテーター：

実行委員：

実行委員：

日時	プログラム	場所
9月26日（火）		
18:00-19:30	夕食交流会	成田エクセルホテル東急
20:00-21:30	国際青年交流会議オリエンテーション	
9月27日（水）		
10:30-12:00	[コースディスカッション 1]	ホテルニューオータニ
13:00-14:30	[コースディスカッション 2]	
15:00-16:00	懇談会	
16:15-17:50	成田エクセルホテル東急へ移動	成田エクセルホテル東急
18:00-19:30	夕食交流会	
20:00-21:30	コースディスカッション	
9月28日（木）		
8:20	ロビー集合	江戸川大学
10:00-12:20	グループディスカッション	
12:30-13:15	昼食	
13:20-14:40	隅本教授によるレクチャー	
15:00-15:50	キャンパス・ツアー	
18:00	ホテル着	
18:30-20:00	文化交流会	成田エクセルホテル東急
9月29日（金）		
9:00-12:00	コースディスカッションまとめ	成田エクセルホテル東急
14:00-15:30	成果発表会	
15:45	日本参加青年、国立オリンピック記念青少年総合センターへバス移動	

1. コースディスカッションの内容

ディスカッション初日、メディアリテラシーコースの参加青年は、一般的なメディア広告及びメディアリテラシーについてディスカッションしました。彼らはマーケティング担当者が一般的に用いる広告トリックについて学び、各国から持ち寄った印刷媒体の広告を分析しました。

その後、参加青年は世界中のニュース報道室がしばしば行っている、顕著なアジェンダ・セッティング及びフレーミングなど、メディア・バイアスと情報操作について学びました。これらのテーマが参加青年自身の生活にどのような影響を及ぼしているかについて話し合い、また、一流報道機関によるオンライン記事のコピーを分析し、皮肉にも偏見と誤報とフレーミングが顕著に見られることが分かりました。この日最後のディスカッションでは、ブザー（ソーシャルメディアで報酬を得ているインフルエンサー）になることの賛否について議論し、グループ初のプロジェクトとしてメディアリテラシーのポスターを作成しました。

ディスカッション二日目は、ねつ造、虚偽報道、釣り記事、詐欺に関する共通の誤解について学んだ後、報道の真偽を見極める力を試すゲームに取り組みました。報道の真偽を見極める手段を身に付けてもらうために、ファースト・ドラフト・ニュース（インターネット上の誤情報の排除と、ソーシャルネットワークで配信されるニュースの質の向上を目指す団体によるサイト）からの誤報と偽情報の典型的なパターンに関する資料を参加青年に配布し、ビジュアル検証ガイドを用いてビデオや写真の真偽を判断する力を養いました。

2. コース目標の到達指標

本コースのディスカッション目標には、魅力的な広告要素の分析や、共通のマーケティング戦術への理解のほか、メディア・バイアス及びねつ造に対する批判的思考スキルの向上、政府、メディア、一般人による情報発信手段の理解が含まれていました。

参加青年の多くはメディア、政府、一般人から受け取る情報に対する批判的思考を身に付けるとともに、受け取る情報が真実ではなかったり、彼らの幸福を念頭に置いたものでもない可能性があるということに気付きました。マーケティング担当者による広告戦術について知ること、より賢い消費者になることができるのです。

参加青年からのフィードバックで分かることは、あるメッセージが真実かどうか判断する際に、信頼できる情報源を複数見つけることの重要性を彼らが理解し、社会とメディアのバイアスを特定できるようになったということです。参加青年の多くはソーシャルメディアにおけるブザー及び報酬を受け取っているインフルエンサーの存在に気付いていませんでしたが、今ではそれらが社会に与える悪い影響と良い影響について理解できるようになりました。また、課題別視察を通じて、日本における情報の価値、報道プロセス及び、テレビコマーシャルで使用されている、人を惑わすための編集技術への理解も深めました。参加青年によるセッション評価から明らかなのは、彼らのメディア情報の活用能力が向上したことです。



日本参加青年 ドミニカ共和国派遣団

私たちは情報の発信者であると同時に、受信者であることを強く意識した3日間でした。メディアの発する情報を鵜呑みにせず、批判的に考えて理解する能力は、即座に身に付けられるものではありません。しかしディスカッションや講義を通して、メディアの意図を知ったうえで、情報を多角的に捉える日頃の意識が不可欠であると学びました。また様々な媒体を用いて内容を比較すること、常に情報源まで遡ること、そして他国のニュースをその国のメディアを通して確認することの重要性を知りました。今後はこれらに留意して、情報の取捨選択ができる受け手となることを目指

します。

会議では計7か国からの青年が一堂に集まるため、その国民性や慣習等の違いが終始見受けられました。各ディスカッション・グループ内では、そのような違いを尊重しながら熱心に意見交換がなされていました。和を以って尊しとする日本においては、反論に勇気が必要となる場面も多々ありますが、会議中は私自身、気付けば外国青年に応えるように熱くなっていました。歴史的、文化的、経済的背景が異なる青年が集まるからこそ導き出せる、有意義な学びや気づきを多く得ることができました。

日本参加青年 ミャンマー派遣団

メディアリテラシーコースでは、様々な国の青年と共に世界中で日々大量の情報が飛び交う中、メディアが提供する情報を、正しく受け止め、活用していく方法を学びました。広告は巧みな技法で商品に対する人々の関心を集めることや、SNSで拡散される情報が選挙の結果を左右させた事実などは私たちにとって衝撃的でした。セッションの中で、班ごとに学びをまとめてポスターを作るときには、各国の青年と各国の現状を共有し、お互いの国について知ることができました。ディスカッションでは英語が得意なドミニカ共和国やアイルランドの青年が中心となって話合いに貢献

することが多かったと思います。彼らはファシリテーターが参加者の意見を求める前に、的確な場面で積極的に発言をし、最終的な発表の時には中心となって話合いを進める指導性を発揮していました。私は各所で意見を述べたものの、彼らほど意見を言えなかった苦い経験とともに、国際社会で指導性を発揮するためには、積極的に発言する必要性を学びました。

今後はこのディスカッションを通して学んだ、情報を正しくとらえて活用する方法を発信していくとともに、積極性を身につける努力をしていこうと思いました。



ドミニカ共和国参加青年

私は日本訪問のための荷づくりをしながら、この経験が自分にとってどれほど特別なものになるかを想像してみました。初めてのアジア、世界でもっとも古く、もっとも尊重されている文明の一つを訪問するので

す。
私の胸は期待でいっぱいでした。高水準のテクノロジー、秩序と体系性を重んじる国民、とりわけ第二次世界大戦後の高度成長など、子供のころから日本に行ってみたいと思っていたからです。

私は日本を満喫するつもりでしたが、ここまで特別ですばらしいものになるとは想像もしていませんでした。日本人の温かさ、おもてなしの心、謙虚さに触れ、くつろぐことができました。

日本発見、風景、おいしい食べ物、伝統、習慣。これらの新しい思い出と忘れられない特別な学びで、私のスーツケースはいっぱいになりました。

国際青年育成交流事業を通じてメディアリテラシーの重要性に気付きました。メディアリテラシーとは、

メディアを利用、分析、評価、創造する能力です。

さらに、エストニア、ミャンマー、チリ、アイルランド、ヨルダン及び日本の代表メンバーと共に、今日の情報メディアが社会に及ぼす影響や、メッセージを伝えるための効果的なメディアの活用法などについてディスカッションしました。

また、今日のメディアのダイナミックな変化やメディアの社会的影響に関する知識も広げました。私たちはテレビ、ラジオ、インターネット、新聞、雑誌などのメディアから受け取る複雑なメッセージを分析しました。

本事業から私が学んだことは、他の文化を尊重することや、私たちを結び付けるものを発見し、私たちを隔てるものにこだわらないことの重要性です。事業を通じて、民族、肌の色、宗教、社会的地位にかかわらず、全ての人は皆、兄弟、姉妹ということに気付くことができました。

ドミニカ共和国参加青年

国際青年育成交流事業は、各国の青年が一堂に会し文化交流を行う場を創出することを通じ、青年の友好を促進するものです。本年度もドミニカ共和国、エストニア、ミャンマー、チリ、アイルランド、ヨルダン及び日本の代表青年が16日間、一貫したテーマについて掘り下げました。様々なテーマの研修、地方訪問、文化体験、日本人家庭でのホームステイ、障害者の社会参加や再生可能エネルギー等の課題に関する公共政策の理解などに取り組みました。

ドミニカ共和国にとって、本事業は日本との歴史的な関係を継続的に深めるものであると同時に、二国間の連携と相互理解に対する日本国政府の関心を表すものでもあります。この事業では私たち青年が自国の大使となり、次世代の各国間の絆を深める役割を担います。私たちはこの事業の重要性を再確認しました。

さらに、キャリア形成、メディアリテラシー、多文化共生のテーマにおける研修は、様々な専門分野に携

わるドミニカ共和国青年にとって非常に有益なものでした。これらのテーマは青年の潜在的ニーズと一致し、取り組まれる機会も少ないため、こうしたテーマに取り組むことはドミニカ共和国と各国の社会に大きな影響を与えることでしょう。私が参加したメディアリテラシーコースでは、虚偽報道を見分けるスキルを身に付け、コミュニケーションにおける社会的偏見について熟考し、メディアコミュニケーションへの批判的思考を共有するモチベーションを得ました。さらに、これらの成果が弁護士、外交官としての私自身のキャリアに貢献し、この事業を通じて国際的なネットワークを広げることができました。日本に新しい家族ができ、地球市民としての自覚が高まるとともに、ドミニカ共和国外交官としての使命も含め、各国と連携を強める可能性について認識を深めることができました。

多文化共生コース

◆テーマ

ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会実現の視点

◆コースの目的

グローバル化により我々の社会は、ますます文化の多様性が増してきている。しかし、個人や地域社会においては、違いから生み出される差別や排除が存在している。このような状況を鑑みると、個々人の文化的な背景を理解し、民族・人種・国籍にかかわらず多様性を尊重することは我々にとって必須事項である。

このコースでは、参加者たちが、文化的背景に基づく違いと多様性を理解し、一人一人が公正に扱われるインクルーシブ社会をどのように実現できるのかを参加国の事例共有と議論を通して学び合うことを目的とする。また、コースでは、無意識のバイアス、特権、マイクロアグレッションなどといった概念も取り扱う。

◆9月28日課題別視察先

公益財団法人千葉市国際交流協会

◆多文化共生コースのスタッフ

ファシリテーター：

実行委員：

実行委員：

実行委員：

日時	プログラム	場所
9月26日（火）		
18:00-19:30	夕食交流会	成田エクセルホテル東急
20:00-21:30	国際青年交流会議オリエンテーション	
9月27日（水）		
10:30-12:00	[コースディスカッション 1]	ホテルニューオータニ
13:00-14:30	[コースディスカッション 2]	
15:00-16:00	懇談会	
16:15-17:50	成田エクセルホテル東急へ移動	成田エクセルホテル東急
18:00-19:30	夕食交流会	
20:00-21:30	コースディスカッション	
9月28日（木）		
8:50	ロビー集合	千葉市国際交流協会
10:30-12:30	ワークショップ	
12:30-13:10	昼食	
13:10-14:30	館内視察	成田エクセルホテル東急
15:20	ホテル着	
15:40-17:30	グループディスカッション	
18:30-20:00	文化交流会	
9月29日（金）		
9:00-12:00	コースディスカッションまとめ	成田エクセルホテル東急
14:00-15:30	成果発表会	
15:45	日本参加青年、国立オリンピック記念青少年総合センターへバス移動	

多文化共生というテーマの特性上、多国籍からなる多様な背景をもった参加者一人一人の存在が学び合いのリソースそのものでした。そのため、ファシリテーターからのインプットはできるだけ抑えて、可能な限り参加者たちが自国の現状や課題、今後の取組について話し合うための時間を確保しました。セッションでは、時には、正答がない問いについて議論することもあるため、ディスカッションではグラウンドルールを作るという、安心安全な場作りから始め、その後この場にある多様性を知る時間を持ちました。大きなグループになると、どうしても英語が母語、あるいは英語が得意な参加者の発言が目立つ場面はありましたが、小さいグループでのディスカッションでは、多くの参加者が積極的に参加し、時間が足りないという場面が多々見られるほどでした。

セッション中見受けられたのは、多文化共生というテーマの中でも参加者の興味やそれぞれの国が直面している課題は、移民問題、異文化理解、教育、政策、

男女平等など多岐にわたるということでした。その中で、参加者たちは、多文化共生に関する問題について、他国の状況を知ることで、これまで知らなかった新しい視点を得たり、国や文化を越えて共通して存在する課題などにも、議論を通して気が付いたりしていました。具体的には、多文化共生社会を築いていくことを、インクルーシブ社会実現という視点から考え、ステレオタイプに自覚的になることや、違いがある相手を尊重する大切さを、議論を通じて以前とは違った深いレベルで認識し、体感しました。真の多文化共生とは、排除や同化とは違い、また干渉することなく、ただただお互いの共存を許すのではなく、お互いから学び合い、影響し合いながら築いていくものであるということが最後の成果発表で表現されていました。今後、参加青年たちがそれぞれの現場でインクルーシブな社会を築いていく担い手になってくれることを強く願います。

日本参加青年 エストニア派遣団

このコースで出会えた青年たちの「人」としてのすばらしさからたくさん学びました。例えば、小グループでの話合いの場面で、私があまり理解できていない事柄に対して「どう理解しているか教えて?」「分からないことはいつでも聞いてね」などと、メンバーが優しくサポートしてくれたことが、私の中で強く印象に残っています。そして、「多文化共生社会とは、まさに今の状況のことではないか。同じ社会に暮らす人の中で、取り残される人がいないようにサポートし、助け合う精神こそ大切なのではないか」ということを学びました。

また、私たち人間は違って当然です。その違いを認めるためには、自分の中にある偏見に気付くことが重要です。偏見を注意深く考えてみると、自分とは違う文化や習慣に対して、また、男性・女性など性別に対して、そして、年齢や職業といった、人を構成す

る様々な要素に対しても偏見はあり得るでしょう。普段から偏見に気付ける姿勢を保ち、私たち人間は排除し合う敵ではなく、共に未来を創る仲間であるという意識を持つこと。このコースで学んだことは計り知れませんが、特に挙げたいことは以上です。



外国青年と日本青年を交えた3日間のディスカッションや千葉市国際交流協会への視察を通して私が改めて学んだのは、“respect”（尊敬）の大切さです。「多文化共生」という大きなテーマの中で、現在世界で起こっている問題（移民や宗教、ジェンダーの問題）について話し合い、その後それらの課題の原因についてのディスカッションを進めていく中で、“no respect”や“no tolerance”が挙げられることが多く、“respect”の大切さを感じました。また、千葉市国際交流協会を視察した際にも、多文化共生社会を実現するためには、異文化への尊敬の念を忘れず、外国の方だけにな

く、日本人も含めて双方が少しずつ歩み寄る姿勢が重要だという話が心に残りました。

“respect”があるかないかで、同じことを思ったとしても、「何を、どんな言葉で、どんな表情で、どんなトーンで伝えるか」が変わり、それによって、相手が不快に感じるかどうか大きく変わります。「自分とは異なる意見にも、穏やかな表情で、真剣に耳を傾ける姿勢を持つ」各人が相手への尊敬の念（respect）を忘れず、皆が気持ちよく過ごせるよう行動していくことが、多文化共生社会を実現するうえでとても大切なことであると思いました。



多文化共生コースの参加青年を代表し、国際青年交流会議の運営委員の皆様及びセッションを通じて私たちを導いてくださったコース担当の藤原加代氏に深く感謝いたします。

多文化共生コースのディスカッション・グループの目的は、参加各国の文化的な類似点と相違点について学び理解を深め、様々な個性を持つ全ての人々が平等に扱われる共生社会を創造するためのアイデアを生み出すことでした。

ホテルニューオータニにて、自己紹介からセッションをスタートしました。各自のアイデンティティ・マップを作成、共有し、突っ込んだ質問をやりとりすることで、互いを知ることができました。セッションを通じて互いを知ったことで、お互いにどれほど異なり、どれほど似ているのかを理解し、相手を受容し尊重することにつながりました。自己紹介の後、懇談会にて皇太子殿下の御臨席を賜り、伝統的な習慣について学び、他コースの参加青年との関係を深めることができました。

翌朝、訪問した千葉市国際交流協会は、地域の外国人市民を日本社会に統合するための支援をしており、無料で語学や文化の講座を開催したり、移住してきた人々に社交の場を提供したりしていました。こうしたことは非常に重要であるにもかかわらず、しばしば市民のニーズがないがしろにされ、外国人市民の日常生活に大きな影響を及ぼしています。私たちは協会が開講する語学講座を見学し、閉鎖的な日本社会への共存の現状を学生から聞くことで、彼らの立場に立って現状を考える助けとなりました。ホテルに戻り、排除、分離、統合、包摂の概念についてディスカッションを深めました。

多文化社会の必然的な結果である排除を生み出す際に、固定観念が決定的な役割を果たしていることを私たちは理解しました。私たちは日常的なリスクを避けるために、意識的、あるいは無意識的に様々な固定観念を当てはめています。しばしば固定観念が望ましか

らぬ状況を回避するのに役立つ一方で、他者と建設的なコミュニケーションをとったり、個人的なつながりを築いたりする能力を妨げることがままあります。これを解決するためには、まず類似点をベースに関係を構築した上で、私たちを分断しているテーマに取り組むことです。互いを尊重し合うための土台を築くことで、相手の人間性を認めることができるのです。

ディスカッション最終日は、振り返りと全体発表に向けたまとめに取り組みました。有益で創造的、包括的であれば、自分たちの裁量で発表を企画することができました。私たちは皆、自分たちの成果に満足しましたが、価値ある学びと貴重な時間だったのは、発表に向けたプロセスそのものでした。最初は、全員でうまくコミュニケーションをとるのが難しいように思えましたが、すぐに全員一致でリーダーを決定し、様々なアイデアを交換し合い、自由にディスカッションを交わし、共通のゴールに向かって着実に協力しました。

参加青年と共に協力して過ごしたこの数日間は、とても幸せな日々でした。全員が知識を深め、他者に関心を持ち、周囲に良い変化を起こすための意欲を得たと確信しています。多文化共生コースの仲間を心から誇りに思います。皆さんは知性と創造性、親切と思いやり、リーダーシップと尊重を示してくれました。ありがとうございました。

